

八条院町跡出土の漆器

(財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 調査地のようす（南東から）

八条院町について 京都駅周辺には、鎌倉時代後期から室町時代前期にかけて、八条院町と呼ばれる町がありました。この町は、平安時代後期に造られた八条院跡子内親王（鳥羽天皇の娘）の御所跡にできたもので、正和二年（1313）後宇多法皇により東寺に寄贈され、莊園となりました。そこには東寺で働く人をはじめ、さまざまな職業の人々が住み、いろいろな店もあり、商工業を中心として栄えていました。

調査のようす 今回の京都駅北側の調査地は、八条院町跡の北東部に位置し、平安京の条坊では左京八条三坊十四町にあたります。調査区の南西部では逆L字形の溝1を発見しました。この溝の北側・

東側は、溝2や柵3～6によって区分切られています。その中では、たくさんの建物の柱穴や、井戸・水溜め・ゴミ捨て穴・便所などを見つけました。建物は規模が小さく、小屋などと考えられます。ゴミ捨て穴の中にはいろいろな生活道具が捨てられ、その他に、土師器の皿のみ、箸のみ、漆器・箸・

土師器皿の3種類を埋めた興味深い穴もあります（写真1）。

町の内部は、東洞院大路に対して東西方向、八条坊門小路に対して南北方向に、柵や溝で宅地が区切られています。各宅地は道路に面して幅が7～11m、奥へ20～23mぐらいの細長いものです。通りに面して家が建てられ、



八条院町と調査地 淡茶色は町屋、斜線はこれまでの調査地。八条院町の年賃帳は、元応元年（1319）から貞治元年（1362）までの間に4通が残る。各年賃帳で支配地城が異なるが、ここでは延文2年（1357）を示した。

その奥に小屋・井戸・ゴミ捨て穴・便所などがありました。宅地の奥は空地となり、烟や物干し場などとして利用されたものと思われます。この宅地割りの権や構は、平安時代の土地区画の四行八門制（一町を32分割する）に合っています。東寺に伝えられた年貢帳の記載と合わせて考えると、中世の町屋の姿がよみがえってきます。

漆器出土のようす 調査では200点もの漆器を発見しました。漆器は土中の環境に左右されやすく、良好な形での出土は、平安京内でも限られていたが、今回はこれまで市内で出土した中世の漆器の合計数を超えていました。

漆器の約半数は、調査区中央の土壤7（一辺1m前後、深さ0.5m）で発見しました。埋納の方法は、底に松の葉を敷き、その上に漆器が重ねられ、上に大量の箸（長さ24cm、太さ1cm前後）、さらに大量の土師器皿が置かれていました。漆器や箸は完全な形のものが多く、日常に使用した痕が見あたりません。のことから、これらは単なる生活のゴミではなく、特別な行事や祭りなどに使用されたとも想像されます。その他の漆器は、溝や井戸・ゴミ捨て穴などに捨てられていました。

発見された漆器 漆器類は、椀（83点）・皿（112点）・鉢（2点）・蓋（2点）などの食器類が主で、いずれも鎌倉時代から室町時代にかけてのものです。

椀は大半が内外面黒漆塗のもので、内面赤色で外面黒色、両面赤色で高台だけ黒色のものもあり、



写真2 発見された漆器

大きさが大・小に分かれます。椀の約8割には内外面と見込みに、赤色漆でさまざまな絵が描かれてています。草木や花の絵（2・3・6）が一番多く、扇や鳥（1）、家紋風のものや、亀甲紋（5）などの幾何学紋様、蓬莱山図（4）のような情景など、人々に好まれためでたい紋様が多く、ほとんどが手書きです。この他、楓や菊・三つ巴などのスタンプを押した小型の椀が數点あります（写真2）。

皿は内外面黒色のものが多く、内面赤色・外面黒色のものもあります。絵を描くものは約半数と椀より少なく、底に1・3・5個の点や直線を何本か描いたものなど、大半が簡素な絵です。鉢にはカタバミの花を描いたものがあります。

漆絵の特徴は、極端に太い線と細い線のコントラストで画面に巧

みに変化をつけ、勢いのあるびやかな線で緊張感と軽やかさを表現するものが多く見られます。また、描き削り技法といって、紋様と紋様の間を細い線状に残することで、図柄の輪郭を浮き立たせる効果を出しているものもあります。このような漆絵は、鎌倉や広島県草戸千軒町遺跡などで発見された漆器と共に通るものは少なく、京都の独自性を感じます。

漆器は、中世になると高級品の他に、簡易な工程で量産された安価な普及品が出現し、今回発見した漆器もこれに含まれます。今回の調査によって一般の人々が、これらの漆器を使用していたことがわかり、京都における中世民衆の生活文化をかいま見る、貴重な資料といえます。

（太田 吉男・出口 熊）